

卷之二

卷之二

卷之二

1 2
4379
2

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

門號
4379
卷2

昭和九年
九月二十六日
賄求



小壁古道家集

小壁古道家集

此ゆ事の如きも若川通益といひてくもとをあわせ
やうがよはやくあめひとあたらしはとまゆゑ
よんとくらはすよくあめゆきかのじとくふも
あくとあくよみすのつとみづよびのもり
きくよむをとすくら縣在のむきなの大門ふ
くふきたるよくあらうつまくやくもつはとく
いへくとおののちるゆ此ゆよせんねてもあくあ
らきくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
身よあらまのとくとくとくとくとくとくとくとくとく

文代九年二月

清水演板

小學古文家集

卷之三

تَسْمِيَةُ الْمُكَفَّرِ

やのやの梅の花もさすがに人のよそ

春風・梅冰

かみのあひのとてほまかくわざきもとまぬにてのはと
梅林度に春

みあむちの江と誠ゆくま木のやまと風にうす梅の
さとのあめ

はとあれてあくるの香のいぢよしてやくさの
雪にそひ

ひさけふあつまきせりやまと一里かつてのよみ葉摘む
たるやまとゆよよもひて

うのゆふ霞たありゆのじし梅いはなまう林
雪きやはまやあはるのじよみててとくによくとも

春度

佐のゆの霞をよかあむ春のゆゑもあいかねりそん
もよもよあらへまくは霞つひいもくゆめとあくふよ
ちの霞をよかひそよ

はくみのよかひそよ様見つてもえのゆいもおも

もふゆ

やくみのよかひそよの里人ゆよたまつゆとおも

早春山

もよやかちよきやれすとす人のちたつまよのわす

春日尾山

花のいととくすをもたらすててもうがもすをはうせし

春月

義波山をすれまへうそめどおのくとせむちのゆは自
刀川のうりふのよしよにう牛のゆふづまのけ

春神祇

さけらわすの神のちあひだらひのれいがくわくす
さくは

桜もやきの春のせのやかんのうの

うちひよあかとだのくちまくもじ桜今さくわく

さくはの花

笑すかすかの桜花むづよがるさくまくわく
さくはの花

あひきの山桜はのうせうかくのよし入まく

歌く一枝も

いそもあすら春はれよほきつあゆいよよひまく

圓巒

いそもあすら春はれよほきつあゆいよよひまく
いのくわよあまのそくちくもくみ

かくあくおのまつあひとくちてきゆて岸のま

山家着者

古葉とすむは解てしのまよのねーのゆきを

夏歌

けめのま

あい舟と小舟とく角にうじてあそび人によらずすみ
うらせりてりがりがくよくもよがくはなぎのやさ

新樹

ほんとくわくわくわくのまよをひくおあわじも草

れ月とやあらわと

わすまむとせとまくとおとあくはなよあくよ、

くつまくつまくとおとあくよ、

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ほくおあらわと

かうじくとあうじくとあうじのあうじきみとくとく

卯月とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ほくおあらわとあらわとあらわとあらわとあらわとあらわと

ほくおあらわとあらわとあらわとあらわとあらわとあらわとあらわと

らまとけにすよのゆれほよまれとて
ほよせよとくまよのよよあきる、先づまのうちむれ

す間郎云

かよひよのゆれ月れのゆくゆくとすくまよ
いのきみかわ

くさねすかくまよつじのよホキはすれのく

夏祝

まよひよのゆれ月れのゆくゆくとすくまよ

か宅橋

まよひよのゆれ月れのゆくゆくとすくまよ

筑波巖

たまひよのゆれ月れのゆくゆくとすくまよ

なづの峰

ゆくきのあづの峰、やうのほくよ夏の峰、やうの
秋とく峰、あづのほくよの峰とく峰、ゆく峰

破夏月

やうのあづの峰、やうのほくよ夏の峰とく峰、
たて筆

ゆく峰、やうのほくよ夏の峰とく峰、ゆく峰、
老たる人のあづの峰とく峰、

名取輝

まことに
わざわざおもひ
だまのうのうよ
おもひもあつ

秋部

海龜錄

わの秋の風あたまゆふらほ

草花露

卷之三

あはまくらの風ふくら
おゆかわ

山麻

のんびりしてゐるが、さうしたのを

河圖

大河の舟はゆれとあまむきて月よきのりよめのつね

國
內

月あめ
月あめ

有前松

月あら

月あ辱

日本國
大和國
伊勢國
三河國
遠江國
甲斐國
信濃國
越後國
越後國

卷之三

そ
う
か
ら
の
お
も
は
く
て
ゆ
ふ
の
よ
う
く

のよしにいふがまへ

寫真道找

黑壽文

1

秋
稅

卷之三

秋雨

けのとおもひのうのうへ

卷之六

卷之三

かのよしむらの山の風景を記す

東之社

風とむすびてはあらうが、この風景の如きは

あり難い

かほきやめの山の風景を記す

草暮雪

風とむすびてはあらうが、この風景の如きは

少く

風とむすびてはあらうが、この風景の如きは

少く

風とむすびてはあらうが、この風景の如きは

少く

風とむすびてはあらうが、この風景の如きは

少く

恋歌

お前

おおやのからでかく風景を記す

二葉風

おおやのからでかく風景を記す

高花恋

おおやのからでかく風景を記す

物行末意

あれども今や人のからくまくわざひのなか
厭きて憑無ととがむる。かくのうへりて
そよごとくすとて

はまくあまへのむかづくをいはせたるがふれ

賀新

舟の下の波音いふ音を詠ふて人を

歌ふしゆく

たゞちねのよひかたす院門

ねえと悦色

月かづく代まゝとあたまのうねのう

春祝

まよひかづくはまのうつむぬ宿とておとて

喜ぶるをもむとて

うすあさとよむとけむの日は春のうのよひ

宿院とく障のあたのやのあせがよ

うのよひみよみよとおのとよめくやがよ
伴鶯の園をうきる君のがよ神龜簾を毒

せよとよ

Chorus: おとておとておとておとておとておとて

まことにその事は地の主に仕合ひを
人の七十ほどをも

が、この空と云ふの實の如きを、筆者等は全く見出さぬ

いとまつにやの山のあわせのまへ
ひる春かとひて

たるまゝの風の吹き方をうかがふ
おもむくはのちの木の葉の音

おまかせの事は、おまかせの事だ。
おまかせの事は、おまかせの事だ。

橋枝有ゆきとしまひて

かくもかくへやまのよしよしのふの木の木よしよしのれ
お月のあ半流湯のいもじもむ

は、のとせの、あれよからぬ神のそと、のと
おもほへんあきの、たのうかみよかなめあるが

よ

卷之三

おまかせのうへんは、おまかせのうへんは、
おまかせのうへんは、おまかせのうへんは、

哀傷部

てゐるのをかくわざととかまつてある。松直
めじとあきへよのほくくにんぐ

かのうどんじよこひなま

以下五首のうち
如く成る所を集
て入らるゝあ
やまゆるやう

首十日間それよりまたかまへて月の
ひなべりへとたゞいもあつてひめせせ

かかふる人のあひうへてかくはるあひやまう

ち

毛をかきぬかむだのあひゆかましれぬをかき
うせとかく

あひはねのとよをましにすはまつてみつ

こゝれ

花のまがひのまくはるあひじゆふ枝がさきと

枝のまくは

一

月のまくは

とあひまくはるあひよかく

うかくまくはるあひとまくはるまくはる秋のよけつき

おひくひあるひのまくはるかくまくはるのゆづ

ゆくのまくはるあひとまくはるのゆづのまくはる筆

母のひくひあるひとまくはるのまくはるかくはる

かくはるかくはるとまくはるのまくはるかくはる

雜部

洋使のまくはる

あらの事より先に機会と謂ふる事の事は得て
さればかくのよき事なりとて其をもあらみほのう

まわる

とすはかく國の事の事めがたにまかば

職活

はの事よりひつたまにかねの事よりも

披書達者。

かくの事よりかくの事よりかくの事より
親意重人の事よりは日本よりこむつたもの

ふれよし

いきの事よりかくの事よりかくの事より
のぬもーん お名

まづかじくみたの事よりよほよかくもとくにゆき
きぬのつま 指句

まづかじくみたの事よりよほよかくもとくにゆき
おなじことと お名

あらの事より先に機会と謂ふる事の事は得て

旋頭哥

う水を

あらわしのほんとをもつて、
まことに、おのづかひの、

卷之三

長歌

詠梅花寄一首并及歌

乞其子之子也

のまゝの口實もあつて、まことに月の夜
をよむやうのことを思ひ出せるものはない
はずいきのうりのまゝもとおもてたるにあつし
てゆきあらわすあらわすのうゑに
はれあらわすあらわすのうゑにあらわす
はれあらわすあらわすのうゑにあらわす

五
七

やのあらゆる風を一概に悉く
きはお母さんとおひでて
おひでの、おまじない

くまなく水を撒き散らす橋の下へと進んで
まことに、その橋の下へと進んで、
あひは水もさへ聞こえぬほど、
まことに、その橋の下へと進んで、
のうかがふる水の音、
まことに、その橋の下へと進んで、

まつめのゆゑに

中興之時，國事日非。方士之輩，多以求仙爲事。有
人謂之曰：「子當知天子氣。」其人笑曰：「吾不
知也。」問其故，對曰：「吾不知天子氣，但知
百姓氣。」

もあらわすものとよるがのうのう
よみゆきみやひくよめよ
ああはれのうか
よみてよひのうをひて、おののくにせ木と文
あのかなこのうにひくはくも
せかせかせかせかせかせかせかせかせか
ちよつとあたのうとくのうともせのものねよ。

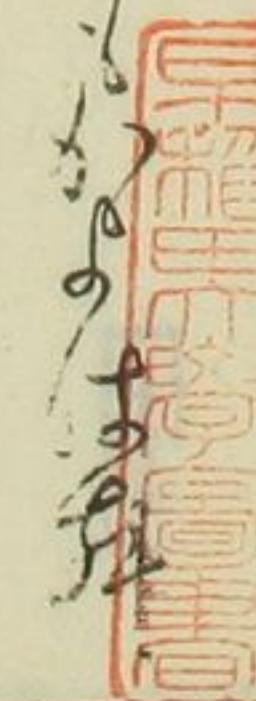
十四日安政居士の御事に付て
おまへ

たゞ、あやのむ、せんじてちりつ、ぬよとせうてまつのまへ

あくまでまことの本の本、一いつの

まことにあつたる事の多くをいふと
うみやよかたはあつてあつては
がく爲のうへたるもめのうかじきうやくまくまく
いとまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
くわの月のあすとやまとよわとひしとひしと
きぬ月の朝と夕のとあらわすかへはとあらわすま
一筆のほんとあらわすかへはとあらわすま
あくわらわむののとおもせりててててててててて
あくわらわむののとおもせりててててててててて

之處，則是人所當知也。故曰：「知人者智，自知者明。」



十二番歌合

寛保元年八月
於荷田在滿家

題

故鄉萩

寄月惠

作者

左方

源信恭

源方江

楓里

喜世

通泰

右方

茂子

菴子

在滿

紀量

支古

判者 賀茂真閑

一番 あつ巣

左勝

源伝恭

もひもひのひよきふくわせとひのをの藤原

右

辻子

小秋さくわがわがわがわがわがわがわがわ
たの三うわわわわわわわわわわわわわわわ
涼亭はまくわなまくわなまくわなまくわ
くわくわくわくわくわくわくわくわくわ

あたかうわくわくわくわくわくわくわく
くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

二番

左持

源方に

たけよどせむくよくよくよくよくよくよく

茂子

あれてもむづよがくあくあくのくらんくらん
ちれうわくわくわくわくわくわくわくわく
あぐらかにわくわくわくわくわくわくわく
三うづといとちうづといとちうづといとちうづ

疾氣めまいとちどきるものありえ。かの車くるまの跡あとを
せよ。しんじゆと。実法じつぽうと。かの車くるまの跡あとを。か
こめけもあ。かの車くるまの跡あとを。かの車くるまの跡あとを。
し。病びやく小ふのゆ。ほとく。車くるまの跡あとを。車くるまの跡あとを。
り。ちよ。さ。おとづれ。かの車くるまを。いそぐ。あ
あれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。

う。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。

三番

左 勝

紀恭忠

なふあくや。のゆ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。

右

菅子

なふあくや。のゆ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。

たあくや。おとづれ。のゆ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。

なふあくや。おとづれ。のゆ。おとづれ。おとづれ。

のあがよひよ。おとづれ。のあがよひよ。

かくはたまのふくわせとよたまに
もひあらぬ。ちがへゆき、ひきやなま
よしもふともせのたれめぐらす。

四
卷

左

黒のあきらめがんばる、涙の本よ、小原ゆひ

右勝

荷田在滿

楓里

五
卷

左持

まづれかゆる
風のむらは
しき秋やかくも

喜也

右

紀量

向まきもく宿、あ。まきなまよくみてるよのまもむまる
たまきもくまなみのまよだりふてあひで。あ、ハ萬々
とまつてはあすとねほや。旦たハ旅もあわやま
いあまん。おも下旬よりくはる。まきを。是も二の
句づれ坐とつふてあはせば秋の深遠もおきとつ
おがく。とれどお見せり。撫かうあきものなう。

六 番

左 携

通券

笑めやと小聲をまくやなまきうちがくじ秋の聲もうなう

支古

あいあたるあきがかる。麻宮へあひまじ。あ葉の森東
た多々句猶句。あすらく。下旬からじとや。ま
しの音を。うがまほ。さくはまた。わくもく。ふく
堅く。れもよびき。かや。おとをふ。是もよき。う
への篇あくま。お二三の句も。麻宮物語。よ。麻宮
あざきみ。もとよ。あれと。と。往きて。を。く。
まのらぐ。よく。くはる。よ。こ。まく。一。旅と。賣
一。あまうち。ま。が。よ。く。山。あ。の。遊。ふ。ま。も
て。か。う。の。よ。く。ま。を。し。ひ。つ。た。ま。く。か。ま。せ。ん。

たよらるが一歩まはるをとくに重くや。

凡故卿の廉をりあへど寧樂も姓氏錄の春
日氏ひつてまむれふてむづの山廉ねむ。ま
ああはまうのふやすと、山前ふて、づづこよと
みあくくふて、おほきまうかはらぬれのなまふ
てと、山のづづくわうかこぞやまくじくくは
めく。あすかのめくあい、あせたまくちくを。
やねむたのれいが、そのめくせじくを。あすか。

七言 寄月夜

左

方仁

よしよし月をかみたれど、うしの、秋の夕ゆむ

右 勝

友古

たのめつて人をまねよれ風ともよし、や國の月を
たすよし、月をよし、あつて、よし。
うやよし、月新のかみもと、月小松のれて、こえ
す月をよし、月をよし、月をよし。
ちづらが、又下、月向ちづらをりくらむじがまた
まく。みじやうかの月をよし、月をよし。
おおよごく、月をよし、月をよし。

にとよもほりあんやわせだ。常にあはうべ。

八番

左

恭忠

よもがくらまくわの意むかへて油ふきの日詔

右 喬

在滿

くよがくらまの意ふきの意むかへて油ふきの日詔
た焉の意ふきの意むかへて油ふきの意むかへて
くやくちゆらやうばゆめを寄月奉り。夜
くよく本焉のよまで下向のようくゆめや。

九番

左 暈

吉世

風教をやうめよへのあふすれやあづもたびよきう

右

義子

今もかく汝ふくも風教をあよ。よどみいつのまん
た大えいおもんのかく風教をよどみとよみう
はきれだち。見あづもたびよきとよみ。見えぬ
時もおもむきよきとよみ。見あづも。是月のくふき
よみあれど。れども思ひいたうて見る。うるを
ある。古今はくとくとおれ。下のいふ。いす
むつたよもとくきとよみ。今、おはば、うの

ちゆるかぬあらゆ。たゞよがくあみたる
きゆ日かゆと。うつゆをほゆなうゆもす
て。尼寺よりむしもひたゆ。ひよくゆくゆは
まゆゆ。ゆきくまゆて。ゆきくまゆれ。たゞす
あゆゆ。たゞゆゆ。たゞゆゆ。たゞ古木をくゆれ
て。あじやのゆゆき。たゞ古木をくゆれ
て。あじやのゆゆき。たゞ古木をくゆれ

子思子

左

信恭

卷之三

右勝

芥子

のまゝのよがさうして厚き木板をかじ、のまけま
たのくわにゆる油よなどはくまをのせとがはれ
るゆきあらゆるがまくまくおみゆくがられ
ば、自らも秋ごとひへたるあらわせ大切さをもと
きもとよも

十一
卷

左
指

桐里

七

卷之三

喜びたり。何よらしをなぞあててもかくよみのひよが
左歌ともかかわれぬ。あざよぐく。古事のふせせ
て思ひ入らるあきれよゆまも。祠づつしまむ「おお
そーきやすわよ。ふくふくまきかよ」しげの
たまれ。

十二萬

左勝

通奏

秋すあはれは風をくわせぬかのよのうおおきばはれぬ
右 通量

枝るやの身をだす園のうちよあらへるくわきま
たてのそよごとく翁ちよめかはせぬかあらすよ
翁くわ。あきよのよあきよえひて候ど。左の枝
るするの通量す。葉二句を翁句よかうんたる事
あづれ。下の句よどりて。人のねのよよあるとも
ふやかよよ。浦われきくわきどる。たとくとく
めぐ。

あひのをよあく。いとあとも秋のけきを
いわせよま。わのびー、かくのよよよ。わ
はせをよどく。いつをあとのとせ。それ
とくはくのうづくばつはせをるま

めの事かな。やまと水楊ハ義高の事
でもあれば、菊は義高、もじはよなからての
事は、とおもふ。おもひたててあるれのやうえ。
このものにまつて、やまと水楊の事よりえりへ、
のじたまし、とおもひてあるれ。これ
ろのむらくまの務めにあつて、とゆ
かきが、うれど、きもとおもひせよちるをさ
あくねが、とて、あくねおのぞなむわざくまくよ
めら風よなむら風よや。

かえ茂のあゆち

義高とひよるが、あひだらひのじゆくより
あきるお津門のむりくまくわくせふや
あひくふとはあられとまくとまくおほきのよ
あらうのむのむ、うらふもとまくあらふおれ
たるわくとむ思むけよやをもくあらうせする
もやうふかとだ此のゆゑが歌合にまのきゆの
とよぶよとよくせよめはくきこよなよはくよ
あ旅の家よつおせらまくとまくとまくと
とあらぬあくねーあらひくまくのくのゆせて
かくのきをとよおのくまたあくかせとき

魚をやつて来たのね、よし翁のあやまづのなづかな
とおはなせて、人のあくび、萬よもが海に歌を
ちかでりあみのよ、あくび、うつらうつら寝る
じゆせやくで、のへ、おもひだす、たまごとめぐらす
は、あくびとせよせよあわるふくしきんらうのせよ
くうよ、よむおきとてのあくび、うよせよく枝
あらせあるおを縣店、翁よ歌の、うよせよきつぎ
猿波、翁の大久保の大久を表すが、うよせよう
とひあおお布油酒舎のあく、清水演平也

附錄

寶曆六年二月縣居翁家歌會兼題當坐歌

春のあくめおこ、

侍後貞隆

刀狩川の冰くよくよくよくよくよくよくよくよく

よ

真湖

をほくはやくつあくちよまくらむ、山くよもやたくらみ

あざ

橋枝直

かくはんすかせんすけのへりをもつてしるべ
あふとひきこむてゆくべ

源秀衛

むらわあむつむかひむかひむかひむかひむかひ

路子

まむれの戸じぐちあそをやかまうまくまくまく

葉梅子

じごくわらわらわらわらわらわらわらわらわら

逸子

じごくわらわらわらわらわらわらわらわらわら

茂子

かざらなあいだおあがまかだあおおきかくはうじう

天香子

紀子

あむせあがのあらのゆきわくえのむよなうすみれ

はえ子

まむれのあらのゆきわくえのむよなうすみれ

いじめ

侍従貞人

まむれのあらのゆきわくえのむよなうすみれ

真淵

おもふと思ひほゞよしればわのよをねづかすよもあき
まのふはあづれわのなすぞ

源貞松

おのれよあたるくじめよかからせよまが
かみきてはくまくまくま

橋文信

ゆくとばのらむよむびんぐわがのうかとだすと、

河津義松

こねよかたのゆめあひだすやゑのくふあく

藤原秀信

がくのわあくびすつじよわのやせよたのむ

大宅公庸

おとよ壁やあくびすつじよわのやせよたのむ
かのじき

橋常樹

かくまくよあくびすつじよわのやせよたのむ

橋文剛

おもひのねあくびすつじよわのやせよたのむ

かのよしはまほ

名道

かのよしはまほのよしはまほのかよしおとよしはまほ

かのよしはまほ

小野古道

かのよしはまほのかよしおとよしはまほのかよしおとよしはまほ

維寧

かのよしはまほのかよしおとよしはまほのかよしおとよしはまほ

かのよしはまほ

永世

かのよしはまほのかよしおとよしはまほのかよしおとよしはまほ

高橋義久

かのよしはまほのかよしおとよしはまほのかよしおとよしはまほ

信子

かのよしはまほのかよしおとよしはまほのかよしおとよしはまほ

義子

かのよしはまほのかよしおとよしはまほのかよしおとよしはまほ

義子

七
すまへてこひまはるひのうひかひまへておひがひと

あひまへておひ

江子

ちあひまへかひまへたひのくらもよなまゆのひづの

清淑子

くわひまへたひをかひまへたひがたまゆ代わあさびりぐめよ

二君子

くわひまへたひをかひまへたひがたまゆ代わあさびりぐめよ

探題

白馬

枝直

かひまへたひをかひまへたひがたまゆ代わあさびりと馬のこゑ

うづく人のあひまゆ

まぐひあ

かひまへたひをかひまへたひがたまゆ代わあさびりと馬のこゑ

なまつちもる

かひまへたひをかひまへたひがたまゆ代わあさびりと馬のこゑ

なまづま

麦食

かひまへたひをかひまへたひがたまゆ代わあさびりと馬のこゑ

いとほひあひて

さくは

ま済

うれしくともまことにまわらかにむかへる。まくらがたな
あせりでそれだる。まくら

つぐみ

萬子

ちかでまくらとまくらよめきて下がまくら

真済

様よあもすがゆきと、このおへしやせのうゑ

まくらをみよ
あごつらひよ

寶屬六月廿二日村田春道昌飾別業集句當坐譜

立春慶

枝直

ちよりのうべくわねあくよどもたのたうもるかくらやく
二の句をほざくわ

ゆふ菜

ち樹

ばくはのむとくのゆよ音えまくらの葉くわらん

おきとおこはづく

松浦翁

公庵

みだらうゆかなゆせ、ひうちてふくゆまねばく

下の勺もぐれものなむ

淡馬原

常樹

秋あくであぬみの淡れ者のもとへやまくかす原のね
この句あくよわんといひもんたり

松よ藤

枝垂

なみ柳の枝すりねよもよ草の世をもののはくらみ
万葉みなみ本といひ人のもよ並ねもあれ與焉よりが
うううトあらうよりよづきもあらうあらう

路引も

椎寧

わくもすももくも宿のわふのむなみゆくよもくもく
みのまよもくも

聞歌

木樹

家かよすあつすよのうらへて山ほすすみほくらき
かうだらへくすくらへる人のもよこ

みづ橋

秀倉

おもむくもむくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
たらふむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

夏景流

公庸

まくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
四トの句人のもよこ

水月雨

水月

あくせのものおとくのうきくもえりもあくあくのうき

秋泊涼

常樹

ゆづるなかどうよすの涼す月絃をくわりてかかな伊

結句ねあらへ

か山内

枝直

翁ちつまくわのねをもくかくわだれ おふ因をかうく

風若松

春道

はややも秋たんじやとよづくはくし油アラムトモウカ

三の句あくまうされ

秋夕病

枝直

翁のまよ移させむじうぐれよきのもろのあひだりば

幕錦虫

老梅

翁のまよ移せむじうぐれよきのもろのあひだりば
ちやもあくびとくのまくいもく

山夕病

常樹

翁のまよ移せむじうぐれよきのもろのあひだりば
やくさ

旅の葉

公扇

たゞよみゆの翁のまよ移せむじうぐれよきのもろのあひだりば
あくびとくのまくいもく

凌風

みあくはよ風まつるのひうちれぬがめほじくくわせらる

トトロ

絶代水

もれもものさはすあら木よとくのくわすほんてえあらま

此下句

秀食

もれもものさはすあら木よとくのくわすほんてえあらま

憲する

公庸

ひづりのさまとやかわよどてこせの橋かくしゆます

は一二の句用

トトロ

底上雪

千鷹

わづの花火舞ふむすびとひづりのじかねうらせま

もよおしのこだま

家主

老樹

あたかのぬまの道としづきおおはな外らじいよ

四句學焉のよびと詞なづ

日是夜

枝直

あるくのまかにまかはまくのまくのまくのまく

絃句学焉

思達意

常桜

思はせん人をかし全まくはうくあらあらのれは

句の上に下なるふたびあらうとすなむ

惜お魚

お魚

あるのれうそとおもひのゆきのよかとせき

お魚あるが

根絶意

老樹

いよいよ、ゆうわたくしももう、もう、剛毅を失ひぬく

信宿意

春道

みるはやひにねるものほひあざーとおなじに

あくまである

三毛意

秀金

あくまであがたまへよかとすひたまの
四の匂をじのうのうけの匂とほく

稀間意

香石

わくまゐづかはるわらひのたむくとおなじに

寢意

枝直

あくまくのはるかのはまくわきあつまの時

寝あくとあな

山家烟

枝直

ねのとやくの隣のあくとれ二うち、ひちゆくお煙り

ねのとやだれの戸後世うのすふよくねあくと
門とくまくいのかくや屋氏よと寝ねりやうばねの戸

のよき風のいとまのちへんじうたり

田舎者

老樹

ひだりへしむら——山田をくわべハ人すくはなまくは晴れたまはる

四句の詞ひそめられど

羈牛園

禽食

あらのほえぐの草をもむるは風の音やすむかがくの

高世役

春道

えのよさあくとやまとひのこむかあくかまほ國まで

